

ミステリ読書案内

2022. 10. 5 発行元

第403号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

結城昌治の代表作

結城昌治については「ベスト表」でも「どの順番で読むか」でも取り上げてきたので、「代表作」を紹介したつもりになっていたが、まだ掲載していなかったのだ。ということで、代表作3作を紹介する。

私の好きな作家のひとり

すでに何回か書いてきているように、学生時代の私は日本のミステリ作家の中で結城昌治と仁木悦子を好きな作家として挙げていた。共に海外ミステリ風のベタベタしない、カラッとした描きっぷりが気に入っていたのだ。

結城昌治と言えば日本で最初に正統派ハードボイルドの作品を書いたと作家とされている。代表作としてハードボイルド作品を挙げようかという気持ちにもなるが、面白さという点では『白昼堂々』と『ゴメスの名はゴメス』の方が上回る。

ということでこれらをNo1とNo2にしてみた。文体はハードボイルドに通じる部分が多い。

No3を何にしようかは少し悩んだ。『暗い落日』『魚たちと眠れ』『死の報酬』『公園には誰もいない』…いろいろ候補を考えてみたが、結局は一番初期に近い『死者におくる花束はない』にした。どれを取っても面白い作品が揃っている。

さまざまな作風を柔軟にこなすのが結城昌治であり、短編作品も数多く残されている。最近になって再刊された本もあるようなので、私のような旧人だけでなく、若い人たちにも読んでほしい作家だ。

NO.3「死者におくる花束はない」

1962年東都書房。私立探偵・佐久と久里十八ものの第一作に当たる。所長は久里。「わたし」が佐久で実質の調査に動く役目。ユーモア含みのハードボイルド作品。

出だしは玉川と名乗る男が時計商の志賀栄太郎という人物の素行調査を依頼しにやってくる。張り込んでみると、翌日、志賀は若い女と待ち合わせをしていた。店に戻った志賀に夕方に電話がかかってくる。妻が殺されたとの知らせが入る。とたんに難しい情勢に陥る。依頼人の玉川からは調査中止の連絡を受けるが、一度調べ始めたものは簡単に止められない。事件の解決も、志賀の行動も、依頼主の理由も謎だらけ。警察や地域を訪ねて回る佐久の行動が読みどころ。

NO.1「白昼堂々」

1966年朝日新聞社。『週刊朝日』に連載された。実在の出来事もヒントになっているようで、当時の世相を反映したコメディ・タッチのクライムノベルである。出だしが北九州の筑豊炭田であり、閉山後の長屋に住む人達が生き生きと生きるようすなども描かれている。私のように年を取った者にはその雰囲気がよく理解できるのだが、現在の若者の目にはどのように映るのだろうか。

物語は富田銀三が故郷である炭鉱町に帰ってくるころから始まる。銀三は東京で戦後掏摸をしていたのだが、刑務所暮らしをした後、刑事の紹介でデパートの保安係になったという。今回は姉夫婦や幼馴染を訪ねるということで筑豊にやってきた。姉夫婦は生活苦で北海道へ移転し、幼馴染の渡辺勝次は…。朝鮮戦争以降の閉山で炭鉱は寂れ、食い詰めてしまった後、窮余の一策で始めたのが集団で掏摸や万引きを生業とすること。ということで、全国を股に掛けた集団窃盗団が形成され、ベテラン刑事との知恵比べが開始される。この攻める側と守る側のコンゲームのような仕掛け合いが本書の一番の目玉である。生活に直結したたかき、生きていくためのアイデアの数々が読者を引き付ける。読みやすく、最後まで一気に進められる。

No.2「ゴメスの名はゴメス」

1962年早川書房。南ベトナムとサイゴンが舞台。と書くと「南ベトナム」も「サイゴン」も知らない世代が多くなったのだなあとと思う。「ベトナム戦争」も遠い時代になってきたか。アメリカに支えられていた南ベトナム政府軍と共産系の反政府軍、そして反共産系が入り乱れての泥沼の戦い。当時、日本では珍しい国際スパイ小説として書かれたのが本書。

日南貿易の社員・坂本が「わたし」という形の一人称で語られる。南ベトナム駐在の香取吉彦が帰国直前になって行方不明になった。坂本は香取の消息を探る役目も持ってベトナム入りする。現地人の社員、香取と一緒に暮らしていたらしい女性、最後の姿を確認されたキャバレー、近くに店を構える華僑、ベトナム警察の刑事、日本人の特派員新聞記者などと情報として集めていく。そんな中、坂本の尾行者が銃で撃たれ、死ぬ間際に「ゴメスの名は…」という言葉を残す。知らず知らずのうちにスパイ戦の中に巻き込まれていく主人公。冷戦時代の緊迫した国際情勢を踏まえての物語。隣にいる人を信じていいものか…。スパイの世界はそういうもの。不安に駆られながらも、スピーディーな行動力で打破していく展開がすこぶる興味深い。